

発行人 桂井 健

への挑戦

70年の展望

70年7月の今、一個の人間は思ふを立ち上げずにはおられない。我々自身が、萌されることなく、そのまゝ覺る存在があつた。67年10月羽田上空（ほうりあげられ、周囲に）
ま中空（ほうりあげられ、周囲に）
関係の中で自らの位置測定が不可能になつてゆく、無間地獄の様
一挙に外部（＝現実）の真実中へと展開することによつてしか、こ

社会体制の中で、一人一人の人格が「他人の自由」という名のものをいまい、ひき荘の中で、自ら主としてやうしをどけてゆく現象をかみさう。それは、然々、一人一人が、自分の真昼の日常の中、降

個の存在

が地獄りの様に目うの中に始ま
目うの存在が、現実から剥離し
いてしまふ。人間が、この様に
在中から出発せねば、脱現実
繰り返す我々の行海は、目うの中
にほうふつとわきこ上る「悪いしや
とげふ」とすることになりな
い。それは、目うの存在の根が
の出發ではなくなる。

「自分の勤め位は、仕事に關して、
てもどうでもいい、生き方、衆どの
もどうでもいい、日常生活に環境と
單調な日常生活に環境とそれに
日、やりきれない氣持を、何かに
ぶちまけたくても、その方法も自
つに出せないので、くだらない難
外出ですりかえていた自分、そ
は自分分、いやでいやでたまら
い。」

「おちちるものを吸収しよう。おちちるものにつかつかつてゆく」とにより、自分をにつめ、追いつく。芸術というものをまなぶ。本を讀み、社会を見ぬ。タバコを吸ひ、お酒の味まで知ろうとした。自分を、メケメケメケにつかれさせることが、ギリギリのところまで追いつめるかもしれぬ、といふはかない夢だった。二人の合宿の個人レポートを並べてみて、一人一人が、この衝動のやりやいさを盡して――それは、現実のなにも（へちま向）てゆかない存在への苛立ち――そして、彼ら自身が、なんとかしやうとするが、今の生活を本當にどうにかしようとすることが、現実の中で、具體的な物事を度々こつてゆくことにはならず、中絶して何ものかをまがう姿を見せつけられ、身を切りやぶる鬼で、自分を追い、つめ、自分自身で、自分の存在をしばりあげてしまふ。鬼

この、現実的行爲の原點を失つてしまつてゐる個の存在（それは、わかつた、範ちゆうに、首をつさうとくる。例會中、誰かが、「今、二んぐいん」とが、その厚く重迄、三ついうことに私は反撥する）

まさに、我々自身であり、それを
を本當にどうにかしようとして、
い壁に自分を頭ごたぶつけて、そん
の抵抗を全身に感じながら、グイ
これからは、反撃ではなく二人間

六月間東合落の然の中へ起こされたのであり、つは眞實を思ふところによつて、目金の金存佐越域にわたる、変質をせざるゝといふことがござらう。

グレイとされるも進んで、三つとすを人間として見ることに始めよう。うと思つゝみたい、ことを言つていだけれど、私達が希み出すところから、お一步はさんな甘つたらういの

うないこととへ向けこの裁の
実存の排絶であった。何故なら、
これを起すすには、我々は、生
まれながら、自らを小さく押し詰
めつゝいた群を取り去つて、この現
在に色々たる形を存在するものな
るをいかにせねばならぬのだ。

解を、貫らぬくことはどうなるか。それは、絶対に、断面として、目張という、私たちが、身を置くところ、
しかも、その、織り出す一本の糸が、
はじけば、切れそうにピンと
張るという、私たちの、身を置くところ、

うだ。
我々は、時代状況との対決のよ
びを、今のあり方から、新しいな
るものへ向けて、徹底的な模索を
分という存在がはじまる。自分
が今、そういうふうにあることの
裏、実線のベクトルが、様々な現
実へ向くといふ。
とするのは、まさにその場なのだ。
その苦し、傷であるという。ことと
同時に、その決断こそが、
ることをいふ。私が実際に手

行ない、あらゆる方法を使つて、
自分の特殊生をはかりなせるほどの
作つた。余裕を裁くことが、この
意味はそこにあるのだ。
写真をつくる時に「あなたに
つけてくか、そのことのミレイド
サが私の前に立ちふゐるような
感じ」で又もや存在する。だがとも
かく、集積をやつてつて、わがわ

はきりと、わかつてしまつてい
る。
「人にならう人間がペー
その言葉を前にして感じている
ことを自分自身のこととしてふま

中の自分をいかにとつかえし
 中の中に徹底的につまめる。その
 わからないことの中に入つてい
 なくてはならぬ。集撒のようは同じ方
 なる。はせんは無理で、65・66
 の（へん）からやらなければならぬ

いこのカーニバルは、
くことは全くミッドイ
なれば、ただ写真を見ていく中
だけでのことではない。今日、早
真を見ていて明らかになつてきた
いんだという悲しみだ。いなもの
が、今う二ひふふがれてしまつた
二をはかりと感ずる。
彼女はいく本橋を渡る様な緊張

は、逆光力和中庸者の自分負
けの力によつてはかゝることだ。
今まで思考してきつたことを
二つに人に解いてしまふ。両刃
としつて、見れなくば、分け
ゆく中、現実との対決を追つた。

の刃でもあつた。
我々が、自分の行動を、こゝろえ
いたる歴史の流れの中にたつこ
によつてしか、自分の苦役にか
れないか、他人を事物にかなすこ
が、自分も事物としてみなされ
ることから、事物と見ると決した
の「行動プログラム」を見い出さ
なくてはならないのだ。

ちた生を解放するべきがよい、と知れたとき、日々生活の中で思うに——それは、下宿を犬のやぐらで、詩人の息子がいみすまはか。その若し、ギリギリのところから行為して、ところが、やうやうした吐きたくない現実的行為の原点は現実にある

70年の展開

感じの何かを、金とを同一の地平に見切つてしまふ視点をもちたい。事物として見る三と、見ない三とは、作者の中で常套化したものではない。また、その様にどうえは

「自分の、とてお持ちでない、自分
をうつめてゆくまづ、はりつ
く」
「Sさんのレポート」
「自分には、とてお持ちでない、自
分をうつめてゆくまづ、はりつ
く」
「Sさんのレポート」
「自分には、とてお持ちでない、自
分をうつめてゆくまづ、はりつ
く」

めに緊要張感をもて呼喚を前に
したとき、私自身は、生きゆく
中で、そういう風にものを見
きつていくものが備えない故に、
のだが私が、その事を自分側
する二に他ならない。

70年の展開

現実的行為の原基は、現実から剥離してゐる存在、逃口をふんぎることによつて、現実へと押し込められ、いつかいつか、また、その様にどうもいつかいつか、我々自身の中に存するのゝあり、そのを具體的に見出す作業を、開始せねばならない。それは、人間の生の叫びを、義理として不可視の中へ消え入れよとすることなく、それを、つなぎとめ、白昼のもとにさらけ出す思想を、種々異なる二に他ならない。

70年代を敷衍する視点のために'67
以降の斗争の意味をあきらかにする
写真集をここに置く

写真集

「10・21 とはなにか」 ¥380

「6910・21」Y340

「6911/13-17」Y360

近刊「70年6月」

東松昭明写真集

日本

NAGSAKI

11 時 02 分

OKINAWA 沖縄オキナワ

お お 新宿

季刊 KEN 噫！ ①万博

写 研 東京都新宿区柏木1-124
興和ビル3F-C

日本の高度経済成長とはウラハラな、日本および日本人そのものの、存在を映像によって呼び起こす。

ここにつかみ出された長崎は、かつての犯罪の現場処写真ではない。同じ犯行が現在にも継続して生きていることの記録になっている。

“人間”の介在を拒む非情なものとしてとられ、処理されている基地の風景その基地と交錯しつつ歪み変質しながらもなお係累を保とうとする血液のメタファーをもの語る。

「時代の顔の色が濃くあらわれている町」一新宿。その新宿に舞台をかり「現代」を追求した写真集。

写真と文章とによる表現のシンポジウム。季刊誌としてここに登場。第一弾「噫!!万博」。



力を志同する故に、自命を、他
に、意識体として変革してゆく
もの創出へと向かう。「文化・運
動」とはそのような運動
位置を指示したEの点。

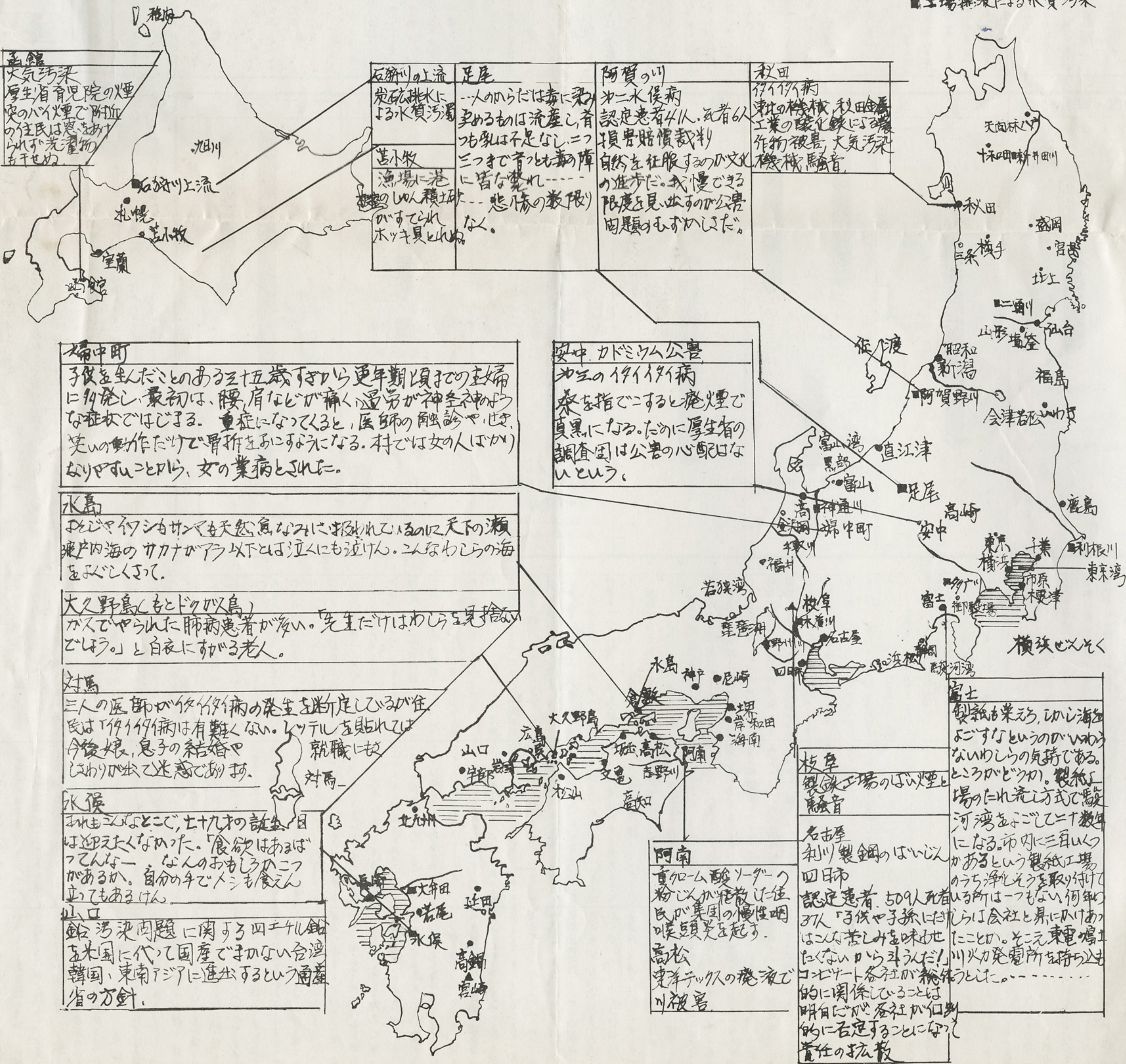
力を志同する故に、自命を、他
に、意識体として変革してゆく
もの創出へと向かう。「文化・運
動」とはそのような運動
位置を指示したEの点。

といふ人の意志はつゞめつゝ
 それば、そのように人間と連
 結してゐた時代の厳しさよ、
 人へ向つた強靱な意識体の存
 在と我々に伝へるものだ。
 日中の実存を歴史に對する主
 として立証せよとする我々は、
 殊へ同時的・同地的に他者の生
 方を志すのである故に、自分と他
 者の意識界として交響しつゝこ
 れの創出へと向かう。「文化・連
 関主義」とはそのような運動
 位置を指示したものだ。

―タブーの凝固へ向って行為せよ―

小公學者が、何れも横おされれば、
 と騒ぎ、新聞がそれを書き下して
 る、まづ、非科学的な問題は
 有害物質の量、どこまでなら大
 夫というデータもなしに、めから
 ないから危険では何もできない。
 住民の公害反対運動といつても、
 かかりの部分に左翼がコトを起し
 すために持出したもののように見
 えるが、そこに注がれて、いる時、絶対
 無関係な公害法案、公害住民と警察との
 懇談会「水俣病報告」する会、の
 万博会場締めおし……と、世間注
 視の公害問題をいかに覆のひとも
 のにするかという、方法と対策が
 講じられていた。
 連日、連日、新聞が何ららの公害、
 生活に関わる問題を載せ、今、の
 全日会館内に情報センターを設置する。
 連日、先
 東京都立品川区田原
 全日会館内
 全日会館内
 全日会館内

▲工場鉍山排水の問題化区域



踊るネコ

世界 683 藤島 字内

ことはでみません……。

本團撮影行執が全日
ていこうとする血みどろの戦いに
我々ほそ

国四
ラ
7
8

中国・四国・九州	関
本部合宿	
広島から四国に情宣 四国連盟プラン	サークル集約内容設定 7月
7/17～7/21	
中国・西国・九州大会	
8/23～8/26	
岡山県連合宿	
広島山口地区合宿	
西南日本を志向する	9月

今日主作の合宿王を所した。この 大学に於ては、高枚 あるいは	し層出した。中々有言と稱する。 未開の地——東北、開これに東北か
-----------------------------------	-------------------------------------